





うゝ日記

天保五年二月江戸の火子火のあもるもじしなひ
 て大坂までまよひ来ぬるこびやどりあし、歌う
 よねるこし日記とよたくさうしたくさうとねひ起た
 してまきねえしるがほまもあぐつりていまのさ
 とまりぬこはこほりねてねひほるこしまもて、
 わづねのさひのさひなるまいて日記とよいしてさう
 百ちあつあくさうあり、らんびのとまひ

い〜〜〜〜〜
あ〜〜〜〜〜
か〜〜〜〜〜

天保五年十一月

目六

やま〜〜

一丁才

自警

二丁才

六義

三丁ウ

真字序

四丁才

假字序

假字のり〜〜

六丁ウ

か〜〜〜〜

八丁ウ

やま〜〜

十一丁才

六歌仙

よきまかり

喜撰法師のうら

初心

つみを、語格

題

うらよむしとく

うらの道

十一丁ウ

十三丁オ

十三丁オ

十五丁オ

十七丁オ

十七丁オ

十八丁オ

十九丁オ

うらのうら

うらのうら

名所 むら野

吉野山

うらうら

年内立春 舊年立春

やまうら

うらうら

十九丁オ

二十丁オ

二十丁ウ

廿二丁オ

廿三丁オ

廿四丁オ

廿五丁ウ

廿六丁ウ

志のぶくわん

廿七丁才

あさぶ原

吉更

廿八丁ウ

あさぶ原

いんげん

廿九丁ウ

あさぶ原のかみりん

卅丁才

いんげんの中

Damenen

いんげん

卅二丁才

いんげん

卅三丁ウ

いんげん

いんげん

いんげん

やうぶ

卅三丁ウ

いんげん

卅四丁才

香句かとし原ひと

卅五丁才

いんげん

正高才逸
清調文韻

卅五丁ウ

古歌集

卅七丁才

後生可い美

卅七丁ウ

異体

卅八丁ウ

隆正のよみ

卅九丁才

野之口隆正

日記一

野之口隆正 志のま

やまとい

真淵翁の古今集序考コキンシラフカク写本まて
よのちのたま 一考あり やまといはく
むろりよまのこまてつねにまといとらひあり
ぬべーとらひまの御禮をねほくよあがつまき貫之主の
やすとことかたひまれころをとあらむやまとい
いふよをたあまといはくころをねさといふべき

沖の干潟子貝とる人を岸よりこれ様などのうご
めくやう子貝のありかあるより岸の人をえん
も又このごとくあるべし人なむが身の丈はえに
ひとをたむび柱をえんべをえりて志ありたれどれ
も此よりくる所はよむたては志はまじくもあ
られさうくる所はよむたては志はまじくもあ
あられくもあむらるのうさひくもいづれも
しるべしいづれもいづれもいづれもいづれも

たぐへんゆきぬをいづせん沖の干潟子貝
とる人を岸よりいづれもいづれもいづれも
あむらたよりよむたては志はまじくもあ
られさうくる所はよむたては志はまじくもあ
あられくもあむらるのうさひくもいづれも
しるべしいづれもいづれもいづれもいづれも

こゝろをあん

六義

古今集序の古ほりいふごとく、こゝろ六義といふこと、
 おもむくことあり、かゝの待まらぬのちありと孔安國ハ云り、
 此れをくくの國の後生よれど、こゝろのちありなり、詩の
 ちつきういふべきことおほくれど、おほくこと、
 けれも程毛詩ハ
 けり、益なきことなれば、いふべき
 けり、こゝろをて、おほくこと、のちの待まらぬのちありと、さしこ
 せぬことあり、やまをいふこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、
 神樂歌

を頌子、催馬樂を雅子、風俗を風子、あそびやいそん
 此れも程益なきことなり、古今集序より入るを
 あそび、古ほり、あそびいふものなほあそび、さしこ
 益なきこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、
 真字序、假字序、
 世よりいふことあり、説子ハ古今集の序ハ中、紀貫之の序
 たるの序を、おほくこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、
 ありといふこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、おほくこと、

なるありし元元ころとよみあらざりたるを世とら
カガクニヤ 歌学者あり其説よりいれちる母名よりまき契沖
ハフシ 法原岡部真岡本居宣長との外の人
ケイニヤ 説よりまされし假字序のそりをとれしあり
トウサチ ぬとなりおづ淑望を貫之タチ 姪とりみうとふへり
セツ 望行の子とりみ説よりまへを貫之とて淑望の
 をいしてありとれ紀氏系図も

長谷雄 — 淑望

淑人

望行

母貫之

とあり

ウチム 淑望モンザウ 寛平年文章生子フ 補モギ 延喜九年大学頭ダイカクノカミ
シ 任トウガクガクシ 同十年東宮学士トウキウガクシ となり入なりとの入あり
 へのより貫之のり存ゾウ 序マサ をほひよりまきつとありとあり
ウチム 赤隆セキリウ 正考セイカウ なるキ 古今集勅撰成てのちおづ淑望トウサチ
ウチム 杉ウチム 序ゾウ をりしもの入るをカ 柳ユウ の加あり
 子しものをねがふとて貫之よれ用せしその漢字を

やうにやまもがなひに訳ししものありしとぞた
たうらゝかゞさゞめてのちか子序をよめばらうえが
かりしやゞらゝかゞさゞめてのちか子序をよめばらうえが
中 勅^{チク}子ありしか序^セを後文^ゴ子^シが序^セしりし
いさゞさゞば真字^マ序^セをま^マいさゞさゞの^ノいさゞさを假字^カ
序^セを表^ヒししものありしとぞた
あへる^{アヘ}への^ノ證^シありし。

延^{エン}享^ギ五年四月十八日の書^{カキ}撰^{ツク}めとぞた

時^{トキ}めて撰^{ツク}るものありしとぞた
と集中^{シツチュウ}子^シ證^シれほくれを^カ 淑望^{シュウボウ}大学^{ダイガク}院^{イン}東宮^{トウキウ}学^{ガク}士^シ
してありしりあり、さるへんありこれ^{コノ}が^ガ貫^{クワン}之^ノ本^{ポン}
子^シありし漢文^{カンモン}の^ノ序^セを^カ 後文^ゴ子^シが^ガ序^セしりしとあり
ぬ^ヌば^バま^マいさゞさゞたりし、
此^{コノ}の^ノいさゞの^ノ序^セを^カ 後文^ゴ子^シが^ガ序^セしりしとあり
ありしこれ^{コノ}の^ノいさゞの^ノ序^セを^カ 後文^ゴ子^シが^ガ序^セしりしとあり
いさゞが^ガありしものありしとぞた、延^{エン}享^ギ七年九月

大井川子馬草ゴコウありし時、その日よもいひてかへりて
 うこの序をめぐりて、貫之がひらきまてかゝると
 をたげ、いひたれ、ひらきまて記す、いひてかへりて
 おんといれ、おんといひてかへりて、
 假字りまのりなきことあり

いへむ萬葉集のごとく、いへむ皆真假字まがまをえし
 ころものあり、ひらきまていひてかへりてのちよもいひ
 のほご、たげたほおんといひてかへりて、いひてかへりてのち

用もちひ、あり、されを新撰萬葉集、日本紀、竟宴歌集、
 神楽、催馬樂、風俗譜、など、ひらきまていひてかへりてのち、
 おんといひてかへりて、いひてかへりて、いひてかへりて、
 い、おんといひてかへりて、いひてかへりて、いひてかへりて、
 コキンコキンシラ、いひてかへりて、いひてかへりて、
 古今集をた、いひてかへりて、いひてかへりて、
 コウバツコウバツダイシ、いひてかへりて、いひてかへりて、
 弘法大師といひてかへりて、いひてかへりて、
 クウカイクウカイ、いひてかへりて、いひてかへりて、
 空海といひてかへりて、いひてかへりて、
 書しよよりのいひてかへりて、いひてかへりて、
 書よりのいひてかへりて、いひてかへりて、

女流の著作を世に出すことは、その人の才力、学識、そしてその時代の風潮に左右される。その中でも、明治時代の女性作家の活動は、文学史の上で重要な位置を占めている。この章では、その中でも特に目立つ存在、野宮和子と高田早苗の二人について、その経歴、創作活動、そして彼女らが残した著作について詳しく紹介する。彼女らの作品は、当時の女性生活の断面を鮮やかに切り取り、読者の心に残るものが多い。また、彼女らの活動は、後の女性作家たちに大きな影響を与え、女性文学の発展に大きく貢献した。この章を通じて、彼女らの文学的価値と歴史的意義を深く理解することを目的とする。

野宮和子の生誕は、明治14年(1881)である。幼少から筆を執り、小説、随筆、評伝など幅広いジャンルに活躍した。代表作『おとぎの国』は、彼女の文学的才能を際立たせる重要な作品である。一方、高田早苗は、明治15年(1882)に生まれ、小説、随筆、児童文学に専ら活動した。代表作『おとぎの国』は、彼女の文学的才能を際立たせる重要な作品である。この二人の作家は、明治時代の女性作家として、文学界に大きな影響を与えた。彼女らの作品は、当時の女性生活の断面を鮮やかに切り取り、読者の心に残るものが多い。また、彼女らの活動は、後の女性作家たちに大きな影響を与え、女性文学の発展に大きく貢献した。この章を通じて、彼女らの文学的価値と歴史的意義を深く理解することを目的とする。

ありとまじり古今集の序もそのちよあまづ淑望一
をばせし漢文まなかきしめいふまのよらありらつ
かきしめいふまのよらありらつ

ダイカクノミトウガウガクシ淑望主の大学頭東宮学主なる序どのジガクニヤの傷学者まで

ありとまじり古今集の序もそのちよあまづ淑望一
をばせし漢文かきしめいふまのよらありらつ

たりとまじり古今集の序もそのちよあまづ淑望一
をばせし漢文かきしめいふまのよらありらつ

ら香カク唐土の待マツの論ロンをせたまはるまてらのものい
りともまじりなむねことばあり別更ニトキな假字カキ序ジヨを
りたるものいふまのよらありらつ
られるまじりなむねことばあり別更な假字序をその
ちよあまづ淑望主の大学頭東宮学主なる序どのの真字マナ序ジヨのそら
をらしなむねことばあり別更な假字序をその
の中よりまじりなむねことばあり別更な假字序をその
いふまのよらありらつ

人々をいふ事あるは、そのなるをいふは、花ももほり
いふべき事あるは、花のなるをいふは、そのなるを
いふべき事あるは、花のなるをいふは、そのなるを
五卷をあげられしつらき、天皇のまじりたるを
おもひしつらきの至極ありき、これ、真字序の
及彼時、變流隔人貴奢、浮詞雲興、艶流泉涌、
其實皆落其元孤榮、至有好色之家、以此為花鳥
之使、乞食之客、以此為活計、之媒、故半為婦人之右

難進丈夫之前、よめるを、そのなるをいふは、
なるゆゑ、人のいふ、撰集の意、子平、
なるより、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、
月のなる、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、
なるより、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、
なるより、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、
なるより、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、
なるより、いふ、人のいふ、撰集の意、子平、

うとをりた、あつりまうとあつりなるまうりい
あつ、古今集評ほまきくもどー

六歌仙

ある人の六歌仙の貫之の撫なみよ
あつりあつりあつり安井直好まきまきあつり
い、紀伊の撫なみよのあつりあつりあつりあつり
まきまきあつりあつりあつりあつりあつりあつり
人あつりあつりあつりあつりあつり

六歌仙のり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

まず、百人一首の尾解チリカイも歌学者のあらばある
ところの子なりて、今も名を聞くのあたぬ人のより、
たまへくしあはせたる *Sumeru no chidori no* *was*
のひさしをとおち、あはれは *was* とあり、昔は *は* *を*
すもむと *was* を用ひしものより、今も *was* の *は*
と *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
あり、*was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
より、首尾停滯なりの *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*

のたまふ *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
停滯テイタイの文字も誤され *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*
was *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は* *was* *は*

まるきやちを然カウが住セむとらんるあり、「ハ」ハりあり
 のいささうをいげんるべし、世セとすと名ナをたへる
 山ヤマと入イちるあり、われはむねむらじとありあり、トよ
ハぬのれがむらの所ヤウをえらるをよろらびてよあるこ
 ちある住者テウヤくひて世をいふらうにせんとすふあり
 解カク得エぬあり、世セをいへばむらじの出家ユツケせぬはむらの心ココロ
 とあり頓トシセイ世セイとして隠者インジヤとあり、さうぢりむらじをいひ世を
 かしらうのいひのこをいぬ入ケハをいひ世をいひむらじを

りありとのさうあり、ラジキ住ヂの境キ界カの境キ界カツガリ
ジヤウシン 城市イウジヤクの地チをいひるあり、

初心

うんむらじとありあり、レハムラの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ
 うんむらじの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ
コハムラの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ
 有りありの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ
コハムラの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ
 有りありの心ココロの境キ界カの境キ界カツガリ

つゞつゞつを用ひてつゞつをり香をたかくしつゞつ
つゞつつゞつがなりつゞつつゞつニコガクのつゞつつゞつ歌
にほつりつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ

しつゞつ

つゞつ

語格ゴカク

初心シンシンのつゞつつゞつつゞつゴカクつゞつつゞつつゞつつゞつ

つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ
つゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつつゞつ

人のこゝを難^シむるものなり、こゝに修^シる^レの^レ時

あるべし、^ゴ語^クを^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

語格^{ゴカク}の自然^{シゼン}の^レあり、^ゴ語^クを^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

格^{カク}の自然^{シゼン}を^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

鼻^{ハナ}を^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

こゝに、

題

古今集子題^{ダイ}しらびとある、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

あなを^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

この家の歌合^{ウタ}とよまのありて、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

とよめ^{トヨメ}の^レ題^{ダイ}を^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

寛平^{カン}延喜^{エン}のころより、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

へり^{ヘリ}とつな^{ツナ}は^ハな^ハりし^シ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、^シて^ハ、

句題百二十首ハ詩の句をとりて類をわけてよめるあれ
 ハこれを書^ミ組^{ダイ}題^{ルキ}類^{ルキ}題のち^ヤあ^{アサキ}と^カい^カん^カ河原の院
 ありあはれる者^ヤ子^{アサキ}秋^{アサキ}来るとい^カ今^カを^カ題^カあ^カつ^カり^カ
 よ^カと^カ評^カ賢^カ朝^カ臣^カの^カ梅^カ津^カの^カ山^カ宇^カと^カま^カり^カ田^カ家^カ秋^カ風^カと^カい^カゆ
 題^カを^カい^カじ^カせる^カと^カい^カハ^カ實^カ景^カを^カや^カり^カて^カ題^カよ^カつ^カり^カさ^カ
 あり^カ堀^カ河^カ天^カ皇^カの^カ所^カ付^カ百^カ首^カの^カ題^カを^カい^カじ^カり^カて^カ歌^カめ^カ
 ける^カより^カい^カと^カい^カたり^カて^カ組^カ題^カと^カい^カゆ^カあ^カの^カき^カり^カ子^カあり^カ
 つ^カひ^カハ^カ禪^カ林^カ寺^カ殿^カ七^カ百^カ首^カ、^カ為^カ家^カ御^カ子^カ首^カな^カど^カお^カび^カさ^カ

し^カま^カら^カと^カい^カなり^カあり^カなり^カハ^カい^カもの^カよ^カの^カい^カふ^カむ^カこ^カろ^カえ^カ
 題^カを^カとり^カて^カい^カん^カハ^カ題^カと^カい^カゆ^カあ^カの^カき^カり^カ子^カあり^カ
 景^カ實^カ事^カ子^カあり^カて^カい^カふ^カし^カ山^カ花^カと^カい^カゆ^カあ^カの^カき^カり^カ子^カあり^カ
 ら^カん^カハ^カ心^カの^カち^カ子^カあり^カて^カい^カふ^カし^カ山^カを^カい^カじ^カり^カて^カい^カふ^カむ^カこ^カろ^カえ^カ
 こ^カろ^カの^カち^カあり^カて^カい^カふ^カむ^カべ^カし^カ河^カ月^カと^カい^カゆ^カあ^カの^カき^カり^カ子^カあり^カ
 け^カい^カの^カち^カあり^カて^カい^カふ^カむ^カべ^カし^カ河^カ月^カと^カい^カゆ^カあ^カの^カき^カり^カ子^カあり^カ
 を^カい^カじ^カり^カて^カい^カふ^カむ^カべ^カし^カ、

いふよふに入

ありしがむろりのうとまて、今ハ田をこ村里こちうがま
原ハくさぐりのさるをいらよ古歌を師とせられ
とき、眼前をさてく古歌よあぶらめれたるなり、
古歌よ武藏野をなまきよまり入るふたのこは
眼前まてまうとをいへるふもあれ形もあつひて
まよ子あつりねを学 者り一あり道も何り
学あつり心を用ふべきまあり、傷学者の唐山
をうつにまはりの道ごまおほくゆ、

吉野山

今の世ハ人まよの心を何のうらみかかへて
用あふま吉いべいづまに馬場のまを
とくへまはあつりせをうりまへて、
奈良の古京よりま武藏野をうりまへて
まびえられらのまをいあれれた大なる山を
言へまよのまをいあれれた大なる山を
まはるくまをいあれれた大なる山を

The first part of the manuscript is a collection of letters and documents, some of which are addressed to the Emperor. The second part is a collection of letters and documents, some of which are addressed to the Emperor. The third part is a collection of letters and documents, some of which are addressed to the Emperor.

春あはれのこころにあはれむかむうりたれたまひまひ
 の^{あはれ}あはれむかむうりたれたまひまひ
 心をいれしむかむうりたれたまひまひ
 心をいれしむかむうりたれたまひまひ

古今集よみあはれむかむうりたれたまひまひ
 の^{あはれ}あはれむかむうりたれたまひまひ
 心をいれしむかむうりたれたまひまひ
 心をいれしむかむうりたれたまひまひ

こゝを、これとてよむむハのの形をとりて、意を
 としぬなり、これハ曲待よりの形をとりてよむ
 のあるハその名の宮女キウジヨもあられハ、風あつじ
 と心帳ココロトウチをとりて、ちりをりしなり、これこれ
 ちあつこのことよく叶ハ入るを、まのよれわざともぐささる
 ぬハ用もちひき、屏風障子ビョウブシヤウジをとりて、風かぜあつじと
 するおれ、つとめてしるまるとなれされとつとめて
 とりひき、つとめてしるまるとなれされとつとめて

子てありぬべし、こゝにききうなること、つとめてあつじ、
 古ふるのこゝをとりて、まのよれわざともぐささる
 つとめてこと、あつじ、をとりて、まのよれわざともぐささる、
 まのよれわざともぐささる、
 借上セウジヤウの罪つみハ、つとめてしるまるとなれされとつとめて

年内立春 〓 暦年立春

組くみ題ダイをつり、又また類ル題タイものり、まのよれわざともぐささる、昔むかしより
 子こニナイリエニ、キウシリ、
 年内立春 旧年立春のわらわを、あつじ、あつじ、あつじ

なり、これハ冬の部フ、またハ年内立春ネン、春の部ハルにてハ
舊年キウネン、立春リシンとくぐうフとをのまじりあり、ハ俗語ハクゴにて
よく知るごとくなり、年内ネンハ冬のこれぬらあり
ハ冬キウネンハ春ハルなりて去年キヨネンをさげんとば
あふばや、さるを次部ツギ百首ヒャクハ冬の部フにて舊年キウネン
立春リシンとくぐうフハ家御ケミ首ミハ春の部ハルハ年内立春ネン
とくぐうフハともあやありなり、その後のものハかく
くあやありてありなり、これハ古今集コキンをあらへん

なり、古今集コキン春の部ハルハありて、ハともあやあり
目メハある在原アラハえ方カタとてのちハともあやありとあり
るより、ハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり
て、ハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり、
在原アラハえ方カタハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり、
と、ハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり、
春ハルの部ハルハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり、
と、ハともあやあり、ハともあやあり、ハともあやあり、

やまのあまき

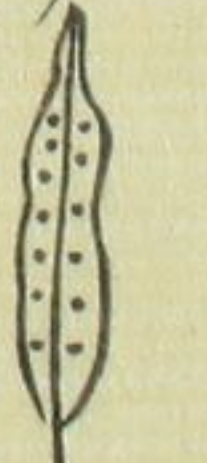
ゴシフ、キシフザフのゴ 後拾遺集雜五小倉の家すす侍りるところの
ひ、この ありり日暮侍る人の侍りはれ山吹の枝を
た ちりてとせき侍りりり、さちもたでさうりすまて
ヤマコ 又の山吹のところもえきりしよりひ子をせ侍
りる区事一よりひつりりる、中務御兼明親王
 ちんちんや花いはなのあらうのひはしななまきとるま
あらうのようのいれもやまあらうの子あらぬのをたひて

あるを、 隆正 葛飾の 山崎村よりあらう、
また 山吹をさらうとあらう一子を結びりしれ
子よりてあらうハ兼明の親王の款冬の文字より
あらまりをつていまるものあらう一本草ハ
款冬花肥實無子とあらうのようのあらうものあらう
んさらぬといれいまのよサ路の傍のいまり同名
イブツ異物といふものあらう一唐おの款冬棟棠を
このいまのいまハ共にあらうものあらう一いまのようのあらう

まうひて、棟棠を 款々とりかへるたねの
テイタク クエトウ
 とぞえかる 公任の所の朗詠集をよんでもその混
サキシム
 へあやもねるもをさしへしとくたれはねり
ミ
 より降のこぼれをたねのたねのこぼれを
タシ
 おもひゆきを 款々とりかへ
タシ
 せらるるあへ
タシ
 これも海村のたねのこぼれを
タシ
 ころを 螺厠といふ所のたねのこぼれを
タシ
セツ
セツ
セツ
セツ

款々をとりかへるこぼれを
 款々の花の名を葉の名をあへ

たあねをいふとたあねをいふとたあねをいふと
 年より年よりたあねをいふとたあねをいふと
 て古今集のたあねをいふとたあねをいふと
ジツケイ
 こぼれをいふとたあねをいふとたあねをいふと
コセツ
 公任の所の朗詠集をよんでもその混
コセツ
 へあやもねるもをさしへしとくたれはねり
コセツ
 より降のこぼれをたねのたねのこぼれを
コセツ
 おもひゆきを 款々とりかへ
コセツ
 せらるるあへ
コセツ
 これも海村のたねのこぼれを
コセツ
 ころを 螺厠といふ所のたねのこぼれを
コセツ
コセツ
コセツ

花のちびさい、一草の名もあらず、古家ののき、あれ
 ともいふ、やういふ庭子おちのさみのさびの物名
 たり、たり、和名抄子、垣衣一名烏葎之乃、夫久佐
 とある、垣衣、あをざり、のきとまて、烏葎、ウガイ
 ざり、なるもり、あまのあり、今、字、後、言、塵、集、あり
 金路草キンロサウ、のき、まて、あまの、葉、ひ、し、の、お、ひ、ぞ、
 う、の、銅、り、の、點、あ、る、さ、お、ち、り、、本草
 小、金星草キンセイサウ、と、あ、り、石、章セキシヨウの、種、類、な、り、唐、お、ち、り、

銅アツメ、り、の、あ、を、金キン、と、い、へ、る、と、お、ぼ、う、り、今、世、よ、を、
 お、ち、り、の、あ、ま、の、貫、衆ニル井の、種、類、よ、し、小、雉、尾、草セウテビサウと、
 り、あ、の、さ、れ、ち、り、タシ、貫、衆、を、雉、尾、草チビサウと、い、へ、り、
 骨、碎、補コツサイホ、石、長、生セキチヤウセイ、お、ち、り、あ、ま、の、さ、れ、と、お、ち、り、も、
 の、あ、ま、の、一、種、よ、あ、る、ち、り、と、お、ち、り、山、侯、石、木ヤマウツクシ
 ち、ち、り、あ、ま、の、あ、ま、の、家、あ、ま、の、ち、ち、り、お、ち、り、あ、ま、の、
 ち、ち、り、と、お、ち、り、あ、ま、の、ま、の、ち、ち、り、古、の、の、ち、ち、り、あ、ま、の、
 ち、ち、り、の、あ、ま、の、ち、ち、り、あ、ま、の、ち、ち、り、

あきつる原

あきつる原あきつる原も亦一花の名あきつる原もあきつる原あきつる原、
 碧花あきつる原、あきつる原あきつる原、顔あきつる原あきつる原あきつる原の花あきつる原の名あきつる原も
 あり、桔梗あきつる原もあきつる原あきつる原、顔あきつる原あきつる原あきつる原の花あきつる原なり、され
 ば新撰字鏡あきつる原の桔梗あきつる原、阿佐加保あきつる原とあり、唐土あきつる原も桔梗あきつる原と
 名づけしるもそのころなり、唐土あきつる原の語あきつる原もあきつる原あきつる原
 さかりしころもあきつる原あきつる原、キツカウあきつる原とあり、されば待經あきつる原
 顔あきつる原之あきつる原顔あきつる原之あきつる原、顔あきつる原今音あきつる原、とあり、唐土あきつる原の語あきつる原もあきつる原あきつる原
 顔あきつる原之あきつる原顔あきつる原之あきつる原、唐土あきつる原の語あきつる原もあきつる原あきつる原

うとあり、あきつる原あきつる原を桔梗あきつる原とあり、あきつる原あきつる原
 あるものあきつる原あきつる原、隆正あきつる原あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 をうあきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 顔をあきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 と名づけしるもあきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 うとあり、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原

あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原
 あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原、あきつる原あきつる原

いづれよりのかみづらひの一條にちりまはるるをわらふ比
みの松のおちををらむとまはるるをわらふに
とれよりのまのひのちりまはるるをわらふに
りまはるるに

あつらひば 歌枕

あつらひしあつらひしなごころ身ををまらぬと
よひにあつらひしとごころも又まらぬよ
中つらみの入のつらみの名なりあつらひしとごころを
まらぬ

紫語とりひつとまらぬとの名釈日本純子ひら日本
紀松記まらぬより、ごころ下のとごころをたすんを
とごころをたすんをたすんをたすんをたすんを
さつらのたすんをたすんをたすんをたすんを
く古今集以後はらまらぬとまらぬとまらぬと
万葉集のうらまらぬとまらぬとまらぬと
とりまらぬとまらぬとまらぬと
なれはらぬをらぬはらぬとまらぬとまらぬと

梅子ね居く用ひく—なり、後世の人、長^{なが}経^{へい}よも七五七五七五とあるべしなりよと人の入^いは^はよ^よむよ
より^よら^らし^しき^き—と^とぶ^ぶを^を用^{もち}ひ^ひく^くと^とあ^あれ^れま^まな^なり^りの^のな^なり、
万^ま葉^は集^{しゆ}の^のま^まを^を然^{しか}ね^ね居^居く^く用^{もち}ひ^ひく^くま^まの^のま^まを^を二^二世^せ—
いと^いち^ちへ^へん^んを^を用^{もち}ひ^ひく^く又^{また}あ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
なり^{なり}を^を古^こ今^{いま}集^{しゆ}以後^{以後}に^に用^{もち}ひ^ひく^くと^とあ^あれ^れま^まれ^れば^ば先^{まづ}あ^あら^らい^い
ま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を用^{もち}ひ^ひく^く天^{あめ}
^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと

梅^う梅^{めい}馬^ばを^を以^{もち}ま^まひ^ひく^く—道^{みち}と^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
つとめ
名^なづ^づけ^けた^たあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
子^この^のあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
い^いふ^ふあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
つ^つま^まあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
つ^つま^まあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと
つ^つま^まあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと^とあ^あら^らい^いま^まの^のま^まを^を二^二世^せと

新古今集菅贈大政大臣ありはまのくみこあま
 たちあはれ都へいざとりかへのおまを「古今集伊勢
 久方のすおひるさきおれを」古今紀友則久方
 のひかりのまはわたるのまを「まはらうあひまといひて
 ちうしゆのまを」久方のひかきまのまを
 天のまをせらなり「まはらうあひまといひて
 しるのまのまをうたへをまをいひて」
 まはらうのまを

うたはあまのまをいひてうたはあまのまを
 ちあはれうたはあまのまをいひてうたはあまのまを
 うらりうらりまてあはれうたはあまのまをいひて
 歌をうたはあまのまをいひてうたはあまのまを
 一世のまをいひてうたはあまのまをいひて
 用ひて格をいひてうたはあまのまをいひて
 うたはあまのまをいひてうたはあまのまをいひて
 用ひてうたはあまのまをいひてうたはあまのまを
 用ひてうたはあまのまをいひてうたはあまのまを

用ふれどりあしをもぢられしものもあつひり
おしよりのものもあつひり用ひたつて
まづしつひらつて用ひたりしものもあつひり
ほつり正誤セイゴのりつておしよりのものもあつひり

ふも入るるは

聖評

ふも入るるはつておしよりのものもあつひり
おしよりのものもあつひり用ひたつて
まづしつひらつて用ひたりしものもあつひり
ほつり正誤セイゴのりつておしよりのものもあつひり

まづつてやつておしよりのものもあつひり
おしよりのものもあつひり用ひたつて
まづしつひらつて用ひたりしものもあつひり
ほつり正誤セイゴのりつておしよりのものもあつひり

あれハ廣ひろく大おほきくさへまのありありさへさへ
人ひとをさぢめさぢめと居ゐるまよりおのづかおのづか清しみきなりなりし
まのまの似にく偏へん固こ頑がん陋ろうなる人ひとありあり風かぜ流ながるぬぬの
ありあり氣き象さうなるまま人ひとを潤うる子こたのづづくくさへまより
勁きんく重おもきなりなり高たかきるよ似にく憐あはれれりる傲おごる人ひとあり
風かぜ流ながるぬぬのありあり才さいある人ひとを文ぶんあるままより
才さいある人ひとを又またたありあり才さいある人ひとを似にく黠さしらなる人ひとあり
黠さしらなる人ひとを風かぜ流ながるぬぬのありあり世よのへへにに逸あるる世よ

もかまらば我われももあまらぬ人ひとをおのづかおのづか氣き句く
あるまよりまより比ひるる大おほきくさへまのありありさへ
似にく放はな蕩たうなる人ひとありあり放はな蕩たうハ真まことの風かぜ流ながるるを害わざふ
ものありあり

古歌集

代集しろととりりななかかりりしし萬葉集まんやふしふ柄しらは
古今集ここんしふハ古今集ここんしふの柄しらなりなりありあり後拾遺集ごしゆいしふハ
後拾遺集ごしゆいしふの柄しらなりなりありあり新古今集しんここんしふハ新古今

集の初めよりあり、十三集のいづくにせよ
見ゆ、

後生可なり

昔の中いはいはるるいさかへあかかたのいさか
かへあかたのいさかへあかたのいさかへあかた
あかたのいさかへあかたのいさかへあかたのいさか
あかたのいさかへあかたのいさかへあかたのいさか
又人よりあかたのいさかへあかたのいさかへあかたのいさか

いさかへあかたのいさかへあかたのいさかへあかたのいさか
あり、^{コセツ} 後生可なり
あり、^{ガセツ} 後生可なり
あり、^{コセツ} 後生可なり
あり、^{ガセツ} 後生可なり
あり、^{コセツ} 後生可なり
あり、^{ガセツ} 後生可なり
あり、^{コセツ} 後生可なり
あり、^{ガセツ} 後生可なり
あり、^{コセツ} 後生可なり
あり、^{ガセツ} 後生可なり

ま入りしるしにいと花にあらはれしは
ふゆのしるしにいと花にあらはれしは
あはれしるしにいと花にあらはれしは
あり。

陸奥の国

陸奥の国にいと花にあらはれしは
ふゆのしるしにいと花にあらはれしは
あはれしるしにいと花にあらはれしは
あり。

とちんこし

月もあつて夜もあつて
ふゆのしるしにいと花にあらはれしは

あはれしるしにいと花にあらはれしは
秋の野に月をまわす

われもふゆのしるしにいと花にあらはれしは
紅葉

春秋の木々の花をば
あはれしるしにいと花にあらはれしは

第三集 人為天然分合對格 二卷

これよりよりの自然他のつらちとして活語の用法古人未幾の
精説をしるべし

第四集 合語格 三卷

苗の代をあらはしつゝ荷のさかむをのさむといふやうの
をあらはすの例格をいふ。といふやうのあらはしつゝいふ
べき理ありてをいふ。いふべきやうのいふべきは古書あり
しりしる例をきよくをあらはせる書なり

第五集 あらはと對格 一卷

あつりとのこの あつりあらはとあらはとあり あつるばつら
なごのこのけを對ありて互にきをききしつゝいふを
いふつゝ考へつゝいふなるなり

三代三百首解 三卷

古今後撰栞述の三代某の中より初葉のさかむのさか
むの百首づゝぬきいふそのさかむとけり

中三代三百首解 三卷

後撰栞述初花全集の中より初葉のさかむのさかむと
百首づゝぬきいふそのさかむとけり

二代二百首解 三卷

千載新古今の中より二百首ぬきいふ附錄子後初花
のいふ百首をぬきいふそのさかむとけり

鼻うづへのさかむ 刻成 一卷

これハ一時の藝文をいふの母の天狗をあらはしつゝいふ
國学の玉ををのいふなり

源氏物語評注

初編 五冊

金聖歎史進王進の評子ありてうらせむと云々名
子ころころを解り文章よのつねあぬゆの用意も
よのつねあぬことをあつて些々のたのしみもせり
る住なり

さきさきゆふあし

五百卷

五十音一音十卷のつらみ稿をねとせり陸山
一生涯の精神をこの書にうめて万世に傳へんとす

候録

五卷

五十音のころをときころのころよと天地造化の理こりて
あのころを説明せる奇書なり世の言はぬ家のこり
がころころのころのころのころのころのころのころ

萬葉長歌百首解

三卷

萬葉集の中より長歌百首撰りてそのころをよ
かり

古今雜談集

五卷

代々の髓脳哥合中よりこりて人のころえと
をゆきこりて

入学奉要

一卷

国学のちあひくををこりて書なり

冠辞考附説

三卷

冠辞考同は初晩年冠辞考よりこりて書入せられ本あり
それを奉りて今書をこりて誤を正しるなり

語格直言

四卷

語意考 玉のを やちまひ ちまひぬ ちまひのちまひま
語学新書 其の外語格をりる書の誤を正し
しるあり

語釈直言

四卷

古事紀傳其の外ちまひまひる書の語釈の誤を正し
しるあり

理学直言

三卷

和漢蘭之新理家の諸説をあけその誤を正し
しるあり

神道受用考證

近刻

三卷

真の神道の世より神道の世とまひぬのちあふぬあり
古今未だの定説をちる 神道よりて儒道に高
く儒道よりて神道に又て教なるありを
そのひくまき神道に實用有益の事多し
ありしる書あり

神道四靈考

一卷

荒霊和霊幸霊奇霊の妙用をしるる實用有
益の書なり 紙上の空論にあらず

八神傳

二卷

八のちまひよりあるもて氣霊質の三川合離し
身をちる理をちるる未曾有の窮理説なり

美術書肆
柏林社書店
東京都文京区本郷6-25
電話 811-5445

三道三欲昇降図説

近刻一巻

神傷仙の三道とゆめうとよふあはれ神代巻と五十正音
とありよめて考へ得る天地間動物の理みく道乃本
原をそのうりうり書なりこの書をよめば神代巻の
大意もわかるべし以上四部一人書表よりなる奇書
なるう観味せばたまふ平穩なる説ありありなり

幽冥備考

五巻

大梅やまのむね
この書は大和大神を由聖大社に於り筆をせしとあり三昧田
村の助五郎にあひててそのうり書をききしりなる奇
説をうめりてしるすそのうりありききしる
神怪奇事を志しし毎條評をえりしなり

